報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　日本語とアラビア語の定性をめぐって

氏　　名　MOSTAFA　Yasmine　Samy　Gamal　Eldin

論　文　内　容　の　要　旨

「定性」という言語現象は、明確に標示する形態素を持つ言語もあれば、その標示を欠く言語もある。「定性」は、名詞句に冠詞があるかないかを考察することだという見解が定着していたため、日本語は後者の言語の一つであるとされてきた。従って、日本語において「定性」についての研究はあまり重視されず、進んでいないのが現状である。日本語の先行研究においては、「定性」、あるいは「話題の継続性」を表す方法として、「省略」及び「ゼロ代名詞」が挙げられていた。また、指示詞による「定性標示」へのアプローチの研究はわずかであり、指示詞を包括的に分析したものは管見の及ぶ限り見当たらない。日本語は、冠詞を持たない言語であるとはいえ、「定性標示」がないわけではない。統語的な標示として働く冠詞がなくとも、場面に応じた適切な定性標示が用いられると思われる。本研究では、「指示詞」による定性標示を明らかにする。「指示詞」の性質や振る舞いを包括的に分析し、「定性標示」としての役割を明らかにした上で、それらが日本語の「定性標示」として定めることができる、ということを示すことを目的とする。

「定性標示」が整っている言語間で翻訳をする際、あるいは、「定性標示」を持つ言語の母語話者が他の「定性標示」を持つ言語を学ぶ際、戸惑うことなく「定名詞句」「不定名詞句」を断定的に区別することができる。しかし、日本語のような「定性標

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　日本語とアラビア語の定性をめぐって

氏　　名　モスタファ　ヤスミーン

論　文　内　容　の　要　旨

「定性」という言語現象は、明確に標示する形態素を持つ言語もあれば、その標示を欠く言語もある。「定性」は、名詞句に冠詞があるかないかを考察することだという見解が定着していたため、日本語は後者の言語の一つであるとされてきた。従って、日本語において「定性」についての研究はあまり重視されず、進んでいないのが現状である。日本語の先行研究においては、「定性」、あるいは「話題の継続性」を表す方法として、「省略」及び「ゼロ代名詞」が挙げられていた。また、指示詞による「定性標示」へのアプローチの研究はわずかであり、指示詞を包括的に分析したものは管見の及ぶ限り見当たらない。日本語は、冠詞を持たない言語であるとはいえ、「定性標示」がないわけではない。統語的な標示として働く冠詞がなくとも、場面に応じた適切な定性標示が用いられると思われる。本研究では、「指示詞」による定性標示を明らかにする。「指示詞」の性質や振る舞いを包括的に分析し、「定性標示」としての役割を明らかにした上で、それらが日本語の「定性標示」として定めることができる、ということを示すことを目的とする。

「定性標示」が整っている言語間で翻訳をする際、あるいは、「定性標示」を持つ言語の母語話者が他の「定性標示」を持つ言語を学ぶ際、戸惑うことなく「定名詞句」「不定名詞句」を断定的に区別することができる。しかし、日本語のような「定性標

示」を持たない言語の場合は、それはそう簡単なことではない。「定性標示」が明白に決定されていないと、翻訳の際に困難が生じることは容易に想像でき、時には誤解を招くこともあり得るだろう。そこで、日本語の「定性標示」を決定する必要があると考える。

日本語を例にした本稿を通して、冠詞を持たない言語でも、「定性」は何らかの方法で表されるということが明らかになった。日本語では、指示詞と裸名詞が「定性」を表す方法の一つであり、「コ」「ソ」が「限定辞」として機能し、「ア」と「裸名詞」が「定性標示」として機能するという結果が得られた。

本研究を通して明らかになった結果は、日本語の学習者の手助けにもなり、更に、これからの日本語の「定性」の研究の世界に新たな視野を開く道筋にもなることが期待される。